

「家がいいね」 第149号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2016. 10. 14

（巨額の建替え費用を、身近な例にして一考を）

お木曳き車は立派なのが良い！

もし町内会の幹部が、この趣旨で町民に簡単な説明のみで、立派だが大きく重い奉曳車の新しい製作を発注したと想像します。住民が高齢・減少する中で、費用も労力も要する遷宮行事を、どう担うか背筋が寒くなります。今までの、お木曳き・お白石持ちの経験では、兄弟町の若者の加



勢と、帰省した親戚衆で何とか曳き切りました。しかし町内への戻り車は、荷を減らしても綱を引く人が足らず、つらい思いもしました。さて立派な車ほど、将来の現役町民の手に余る苦役になる可能性はないでしょうか。伝統を伝えるとしても、子孫に重いツケを回すことへは熟慮を要します。

では、伊勢病院の建替えは、適正規模なの？

傍観しないで、自ら綱を引いてみてください。現状と見直し、将来の費用負担ずしりと重いでしよう。車に、新荷（予算）を積み増す時間待ち、多々でした。



あれ、それ何の荷なの？ **ちゃんと調べて！**と言ったら、宇治橋曳き込み（市議会採決）を急がれちゃいました。

「医療にたかるな」という本があります

10年前、夕張市と市民病院が経営破綻しました。医療再建を託された村上智彦医師の著書では、身の丈の診療機能に縮小すべきなのに、生活と健康の問題を病院存続に丸投げする住民意識も浮上しました。さほど既得権益は返上困難なものです。



私の場合の、ポケモンGO！

ポケモンが好きな若者世代では、

スマホ片手に街に出て、大騒ぎのようです。風景の中に仮想のポケモンの像が出現するので、引きこもってもおれない（笑）社会現象だそうですね。

私の場合は、ある街角、見覚えあるお宅の前に来ると、訪問していた状況が急に眼前に浮かびます。もう「ごめんください」と玄関を開けることはできないのですが、懐かしい患者さんや家族の顔も続いて登場します。看取りまで一緒に行った家では、なおさら「今どうしていますか？」と訪ねて言葉を交わしたい気持ちがつのります。



この先の、休診日のお知らせ

☆ホームホスピス全国研修 大阪

12月3日（土）～4日（日）

「とも暮らし」の意味

暮らしの中で「死にゆく」こと

「聞き書き」って何？

誰でもできる入門案内

10月23日（日）

10時～12時 津アスト

講師 坂口美和さん（三重大学看護学科）

（みえ生と死を考える市民の会 主催）

会場の都合で、24名の定員、申し込み制

電話 0596・63・5226 へ



タケシさんの、メント・モリ 裏面掲載



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105

メール homecare@kr.tep-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可

昔の人の性根が据わっていたのは、
少なくとも今の俺たちよりは、
自分の死について具体的に考えていたからだ。

「メモント・モリ」という警句がある。

ラテン語で、「死を忘れるな」という意味だそう。

忘れちゃいけないのは、他人の死じゃない。自分の死だ。

人は必ず死ぬ。こんなにたしかなことはない。

それをわざわざ忘れるなっていうのは、簡単に忘れてしまうからだ。

ローマ時代の言葉だっというけれど、今よりはるかに簡単に人が死んだ時代でも、こんな言葉があつたらいいから、人間はいかに簡単に自分が死ぬってことを忘れるかって話でもある。

現代人はさらに酷い。まるつきり忘れ果ててしまっているといつてもいい。

医学が進歩し、平均寿命が延びて、死を目の当たりにする機会が激減した

からだろう。

それは幸せなことではあるけれど、現代人が自分の生き方について、あまり真剣に考えなくなったのはそのせいじゃないかと思う。

概念の死と、現実の死はまったくの別物だ。

昔は死が、そこら中に転がっていた。道端に死体が放置されている時代もあつたし、

兄弟の何人かは幼いうちに死んでいた。行き倒れもよくあつたし、病氣や怪我で

簡単に人は死んだ。飢饉や災害で、膨大な死者が出た。

死を目の当たりにすれば、誰もが自分の死について考える。

死を考えることは、生について考えることだ。

昔の人の性根が据わっていたのは、少なくとも今の俺たちよりは、自分の死についてよく考えていたからだろう。武士道が死ぬことだったのは、死を覚悟することが、しっかりと生きることにつながると思つていたからでもあるんじゃないか。

現代人は、その正反対の生き方をしている。

平均寿命がいくら延びたって、人が死ぬことに変わりはない。人はいつか死ぬ。

それは今も昔も変わりがないはずなのに、そのことには目をつぶる。死は自然の摂理なのに、まるで人生の不条理か何かのように扱う。

誰かが殺されれば、ニュース番組は殺人の原因を克明に調べ上げ、なぜ殺されたのか、なぜ殺したのかを糾明せずにはいられない。

こういう犯罪を防ぐには、どうすればいいかを口から泡を飛ばして話し合う。

誰かが病気で死んだときも、同じパターンだ。どういう病気で死んだのか、

どうすればその病気を予防できるかを熱心に説明する。だけどそれじゃ、死んだ奴は

何かとんでもない間違いを犯したのだといっているように聞こえる。

犯罪防止や病気の予防なんていうのはただの言い訳で、死を視聴者には関係のない

特別な現象だと説明して、安心させるのがほんとうの目的なんだろう。

まるで死を世の中から隔離しようとしているみたいだ。

そういうことを番組の製作者が意図してやっているとは思わない。

それが、今の風潮なのだろう。人が死ぬのは当たり前で、死体は、いつてみれば

自然の一部なのに、日本ではテレビ画面に死体を映すのはNGだ。

さっきまで生きていた人も、死んだ瞬間にテレビには映せなくなる。

死は人の目から隠される。お茶の間に、本物の死を持ち込んではいけないうつ

ことなんだろう。

そのくせドラマや映画では、殺したり殺されたりが日常茶飯事だ。殺し合いも、

死体も、山ほど出てくるけれど、それはすべて偽物の、生きた役者が演じる死だ。

それならどれだけ殺そうが問題はない。あれはフェイクで、あの死はすべて偽物で、

撮影が終われば、死体は笑って起き上がるとわかつているからだ。

おかげで俺たちは、死ぬことを忘れて生きている。いつかは必ず死ぬのに、

そのいつかは明日かもしれないのに、自分だけは永遠に生きられるようなつもりで

脳天気毎日を過ごしている。

だけど、死から目をそむけることは、生から目をそむけることだ。

それこそ、「生きてる」実感なんて、どこからも生まれない。

現代人のモラルが低下したなんてよくいつているけれど、もしそれがほんとう

なら、理由はそれだと俺は思う。

道徳を作るなら、まずは自分がいつか必ず死ぬってことについてよく考えてみる

ことだ。

自分の死をしっかりと腹におさめておけば、人生でそう大きく道を誤ることはない

はずだ。

それだけは、引き籠もりのニートだってIT長者だって、この世に生きている

あらゆる人間にとって意味がある。誰もが結局は死ぬんだから。

メモント・モリは、道徳の土台なのだ。

北野武

新しい道徳「いいことをすると気持ちがいい」のはなぜか
幻冬舎 2015 より引用 (168ページから171ページ)